



三重県公立小中学校教頭会
〒514-0003 津市桜橋 2 丁目 142
教育文化会館別館 3 階
TEL 059 (228) 2340
FAX 059 (228) 2271
E-mail: mieheadt@hyper.ocn.ne.jp

第61回全国公立学校教頭会研究大会滋賀大会

「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」

身近な環境との関わりを通じ、
接続可能な社会の担い手となる子供の育成

湖国の風を感じながら～全体会に参加して

伊勢市立有縄小学校 深 川 昭 久

【開会前】

開会の前に、「よし笛」のコンサートが披露された。環境教育が大きな課題である滋賀県にとって、琵琶湖畔等に自生するヨシの笛音は、本日から3日間に渡って開催される大会への期待を高めるとともに、全国から集まった教頭先生方の旅疲れの癒しにもなった。

【開会行事】

今年度の全国大会研究主題は「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」、キーワード《自立・協働・創造》、サブテーマ「身近な環境と関わりを通じ持続可能な社会の担い手となる子供の育成」と設定された。

「身近な環境」とは、自然環境のほか、人、

物、文化等、子供を取り巻く様々な環境を想定し、「持続可能な社会の担い手となる子供の育成」とは、ESD 理念に則り、環境、経済、社会が抱える様々な課題を自らの課題としてとらえ、身近なところから取り組み、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すための教育をめざすということであった。



【基調提案】

本年度は、第11期全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育む未来を拓く学校教育」の3年次のまとめの年である。この3年間の研究の成果と課題を明確に示し、さらなる深化・発展を目指し、新たな視点も盛り込み、第12期の全国統一研究主題につなげていく。

【シンポジウム】

コーディネーター、シンポジストの方達が、それぞれの立場や視点で、熱く語られていた。
テーマ：身近な環境との関わりを通じ持続可能な社会の担い手となる子供の育成

○コーディネーター

小林 圭介（こばやし けいすけ）氏
滋賀県立大学名誉教授

○シンポジスト

- ・小林 徹（こばやし とおる）氏
企業家として、企業活動を通じて、子どもたちに琵琶湖畔でのスポーツ体験学習や水環境体験学習の機会を提供している。
- ・今関 信子（いまぜき のぶこ）氏
児童文学作家。子どもの遊び、児童文化等に関して広く活動している。
- ・勝山 浩司（かつやま こうじ）氏
宝塚市教育長や文科省青少年課長を歴任し、中央教育審議会答申作成に携わる。

第1A分科会

「教育課程に関する課題」に参加して

亀山市立亀山西小学校 村 山 文 代

私は、「教育課程に関する課題」の第1A分科会に参加させていただきました。第1A分科会では、教育課程実現のために、『「組織」「運営」「連携」の視点から考える副校長・教頭のリーダーシップのあり方』『学力向上に向けた授業改善と学びの環境づくりを教育課程に位置

付けるため、副校長・教頭としてどのようにかわっていくべきか』を柱に協議が行われました。協議に先だって、旭川市立東五条小学校からは、中学校区ごとに作成した「小中連携・一貫教育推進プラン実践シート」に基づいた実践の推進、小学校英語において60分授業を位置付けた取組、市の教育課程の指針を踏まえた教育課程の編成、主幹教諭の効果的な活用、働き方改革プランの策定・推進について、各校の教頭が連携を取りながら推進されている実践について、提案いただきました。また、後半の京丹波町立蒲生野中学校からは、学びを育む京丹波メソッドが確実に定着されるよう、授業改善チーム、家庭学習改善チームなどを活用し、言語活動を効果的に位置づけ、宿題の出し方、一人学



習ノートの取組、学習ルームの開設、自己管理手帳の取組などを全職員共通理解のもと教頭が中心となって取り組んだ実践について提案いただきました。

協議の後の情報共有では、「どの学校も教頭が中心となり進めているが、教頭会などで連携を取られていることが推進に繋がっている」「教頭は教職員の意識を繋ぐようにすることが大切である」「教員が指導力・資質の向上に努められるよう、自主性や目的意識を持たせるようにすることが大切」などがあげられていました。

指導助言では、「小中連携の中で、小学校と中学校が同じ方向で組織的に取組をすすめることが重要である」「集団づくりも学校環境づく

りのひとつである」「継続をしていくためには、発想を加えていくことが大切である。また、意味合いを共有して取り組むことも大切。取り組みの成果を出すようにしていくことが大切」など、これからの取組の参考となる指導・助言をいただくことができました。

大会に参加させていただき、情報収集、人材の配置などを含め、教職員の取組に結果を出せるように教頭会での連携を密にしながら、取組を進めていくことが重要であることを改めて認識するとともに、明日からの取組の推進に向けて、全国の仲間から力をいただくことができました。貴重な機会をいただきありがとうございました。



第1B分科会

「教育課程に関する課題」に参加して

御浜町立御浜中学校 喜田 功

今年は長雨が続いたと思ったら、梅雨明け後は猛暑日の連続です。滋賀での3日間もうだるような暑さでしたが、全国から2700人が集まり、エアコンの効いた高級リゾートホテルの中で、外の熱気にも負けない熱い発表がありました。第1B分科会では、2本の提言がありまし

た。福島県北会津地区教頭会から「確かな学力の向上を目指した小中連携の取組と教頭のかかわり」、滋賀県守山市教頭会から「社会に開かれた教育課程の実現を目指して」というテーマでした。

いずれの発表でも、教頭が体制を上手くコー

ディネートしており、そのことによって組織同士の連携が密になっていました。また、学校と家庭さらには地域とをつなぎ、協働体制を築いていくことで、学習環境や習慣作りへと繋げていく実践を聞き、教頭の役割の重要性を痛感しました。

その後の討論で、この分科会参加者の多くが中学校区での「校区研」を取り入れていることを知りました。中には幼稚園を加えた幼小中での研修を行い、情報の共有や取組の一本化が図られていました。地区として同じ方向性を持って繋がることの大切さを改めて感じるとともに、その調整や運営を地区の教頭会が中心となっていたことから、教頭同士の連携の大切さも感じました。

教頭の仕事は多岐にわたっています。日々の仕事のなかで「どこまでが教頭の仕事なのか」という疑問を感じる事が多くあります。最後の講評で「自分がやった方が良いものは人に任せる。」「任せるのは作業ではなく責任である。」というお話がありました。自分の働きが、教員にどのように伝わり、彼らをどう変えていった

のかを感じられる教頭でありたいと感じました。

今回、全国公立学校教頭会研究大会滋賀大会に3日間参加させていただき、他府県からの参加者の様々な実践や情報を知ることができました。また、保護者、地域への対応などで抱える悩みも同じであることも感じました。しかし、子どもたちの成長を願い、日々頑張っているところに変わりはありません。少しリラックスできた夏休みではありましたが、また、2学期が始まります。(これが発刊される頃は2学期も後半だと思いますが) きっとまた、目の前の仕事に追われ、イライラしていることでしょう。そんなとき、今回の研修で感じたことを思い出し、元気になっていこうと思います。



第2分科会

「子どもの発達に関する課題」に参加して

いなべ市立藤原小学校 伊藤弘樹

7月31日(水)から滋賀県大津市で全国公立学校教頭会研究大会が開催されました。1日目は開会行事とシンポジウム。2日目は各分科会。私は第2分科会「子どもの発達に関する課題」に参加しました。3本の提言についてそれぞれグループ討議を行う形で進められました。私が提言の中で印象に残ったのは甲賀市の取組で、

様々な事情により家庭で生活できない子ども達を受け入れる児童養護施設から通学してくる学校の教頭先生の発表でした。どの子も育つ学びづくりのために、授業を5つのルーティンで考え、「①子ども主体の課題提示②一人学びで自分の考えを持つ③ペア(グループ)で共有④授業のまとめと振り返り⑤家庭学習のための課題

づくり」で構成する。家庭学習は復習だけでなく次回予習として学びたいことをまとめる。というものでした。このような統一したスタイルに取り組んでいる学校や地域はあると思うのですが、市内小中学校全てでスタイルを徹底し、市の教頭会も授業づくりに力を入れているという話を聞いて、取組が市全体のものになっているということを感じました。

分科会で私は札幌・埼玉・横浜・奈良・京都・徳島の方々と一緒にさせていただきました。他道府県のような話を聞いていると、所変わればいろいろだなと思います。京都では、児相に入るケースの子どもを一般家庭が一時預かりをしてくれる里親制度というものがあること。埼玉では、授業を持たない不登校対応専門の人が学校に配置され、不登校や別室登校の子どもたち



と教師や学級の仲間とをつなぐ役割を果たしていること。横浜市内の学校には児童支援専任教員が配置され、保護者相談から外部機関につないだり、特別支援コーディネーターを行ったり、教員のプリント印刷や会計集金業務などを行って教員業務全般をサポートしているということ。「子どもの発達に関する課題」に関わって教職員の働き方改革の話まで各道府県のような取組を聞くことができたことが最大の収穫でした。

最後に、第2分科会は「子どもの発達に関する課題は様々。学校内だけでは限界があるから、外部と連携、それを市町単位で、そして方法を“見える化”していくことが大切。」とまとめられていました。このことを自分たちの地域でより具体化していくことが私たちの務めなのだと感じました。

第3分科会

「教育環境整備に関する課題」に参加して

津市立芸濃小学校 田中 英

令和元年7月31日（水）から8月2日（金）まで、びわ湖大津プリンスホテル他にて開催された第61回全国公立学校教頭会研究大会滋賀大会に参加しました。「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」を研修主題（最終年

度）とした本大会の2日目、第3分科会（於：クサツエストピアホテル）では、「教育環境整備に関する課題」として、3つの提言がなされました。

1つ目の「働き方改革」と教頭の役割 — 「学

校における業務の効率化」―（東近江市教頭会）の提言では、退勤時間の意識化等による教職員のタイムマネジメント力の向上と校務支援システムの活用による事務の効率化、週2日以上 of 休養日の設定による部活動における教員の負担軽減、地域学校協働本部事業の活用による専門性を持った多様な地域人材等の活用等の取組が紹介されました。特に、グループウェアの活用による職員打ち合わせ時間の短縮、校務分掌フォルダの統一による業務のスムーズな引継ぎ等、情報化の実践事例は大変参考になりました。

2つ目の子供が安心・安全に過ごせる環境整備―学校・地域・家庭との連携を通して―（名古屋市教頭会）の提言では、地域ぐるみの実効



性のある安全マップ等の作成による地域の防災力を生かした防災教育、地域と一体となった学校防災の推進等について紹介されました。まずは各学校において、教職員の防災意識を高める必要性があると感じました。

3つ目の地域連携教育と教頭の職務―日本一広い村にある学校の取組―（十津川村・十津川中）の提言では、小・中・高の学校間の連携による連続性を大切にした教育、学校と地域が一体となった地域の次代を担う児童・生徒の育成等の取組が紹介されました。児童・生徒と地域とともに行うカリキュラムマネジメントにおいては、地域コーディネーターの重要性を感じました。

また、それぞれのグループ協議においては、3つの提言は、今日的課題としてそれぞれが密接に関わっていることや、教頭として学校における課題を見つけ、何らかの手立てを打っていくこと、中間教員の人材育成、働き方改革と新学習指導要領の完全実施等について意見交換を行い、有意義な時間となりました。

このような貴重な機会を与えていただいた関係者の皆様に感謝申し上げます。

第4分科会

「組織・運営に関する課題」に参加して

四日市市立朝明中学校 山崎 浩文

第4分科会では、3本の提案がなされ、21のグループに分かれて協議した。

1本目は、滋賀県大津市の中学校から、学校の組織力を高める教頭の役割―校内研究による授業改善から教育目標の具現化へ―についての提案だった。

校内研究において、全職員が、学ぶことの楽しさや喜びを実感できるような授業を目指し、一斉授業形態だけでなく、ペアやグループ学習を積極的に取り入れていくことで、教師が主体となる授業から、生徒自らが主体的に考える授業へ改善し、生徒同士の学び合いを進めた。

教頭が①議論の整理、見える化 ②生徒が主体となる指導観の活用 ③生徒、教職員、保護者、地域への発信 ④教員の力量の向上という4つの役割を担い、全職員の意欲を高め、組織の結束を強めた事例の報告であった。

グループ内でもこの取組を是非参考にしたいという感想が聞かれた。

2本目は、和歌山県紀美野町の小学校から、小規模校における学校活性化を目指した取組—地域や家庭、校種間の連携を通して—についての提案だった。

中学校区を単位とした学校運営協議会を中心として、地域とともにある学校を目指し、校種間交流にも積極的に取り組んでいることが特徴的であり、特に中学校、高等学校や大学とも連携し、中学生、高校生、大学生がそれぞれの学校行事に参加し、また、地域との交流も深めている事例の報告であった。

3本目は、岡山県矢掛町の小学校から、学校小規模化に伴う課題を克服する取組—矢掛町における合同授業と合同学年部研修会の推進における教頭の役割—についての提案だった。

小規模の小学校同士が合同授業を行うことに



よって、平素は交流のない子どもたち同士のコミュニケーション力の向上や、教員がお互いの授業を参観し合うことによって、各自の授業力の向上につながった事例の報告であった。

2本目、3本目の提案では、継続的、組織的な連携を進めるために教頭のマネジメント力が不可欠であり、その力量を向上させていくことが重要との感想が出された。

また、少子化に伴う課題の切実さを感じた。

今回、この研修に参加させていただき、全国の副校長・教頭先生方と意見交換を行い、多様で具体的な実践等を知り、多くのことを学ぶことができた。このような機会を与えていただいたことに感謝します。

第5A分科会

「教職員の専門性に関する課題」に参加して

志摩市立神明小学校 山 本 太

1本目の提言：香川県善通寺市立筆岡小学校から。提言内容は「若年教員を計画的・組織的に育成するための教頭の役割—地域の協働体制を生かした取組を通して—」。

善通寺市では、急速に職員の若返りが進んでいるため、市全体としてこの課題に取り組んで

いる。初任研等とは別に「外部の指導者（①学習指導者②現職教育指導者③専門的知識の豊かな指導者）による指導」と「若年教員研修会」等を実施している。教頭としては、これらの取組を、校内で行っている取組とつなぎ全職員に広げ共有することを大切にし、外部の指導者に

は、指導のポイントを伝えた上で指導をお願いするとともに、若年教員のプライドを傷つけることのないような配慮もお願いしているとのことであった。

2 本目の提言：兵庫県高砂市立荒井中学校から。提言内容は「教職員の資質向上に向けた教頭の役割—『高砂市小中一貫教育』の取組を活かした道徳教育推進のあり方—」。

高砂市では、各中学校区でめざす子ども像を共有し、その状況や実態に応じた「高砂市小中一貫教育」に取り組んでいる。道徳教育における校区の特徴的な取組として、中学生が毎月2のつく日に校区の2つの小学校へ出向いて行う



「2 (二) コ2 (二) コアイサ2 (ツー) 運動」が紹介された。また、校内での取組としては、「3 G Tを意識した授業の展開」や「学年の教師がローテーションで行う道徳」等が紹介された。(3 G Tとは、Goal (めあてが明確)、Goods (物を取り入れる)、Group (班を使って議論を深める)、Think (深く考える授業の展開)を表す。)道徳教育の実践研究における教頭としての課題は、「学び」と「育ち」の連続性を踏まえた指導システムを構築し、教職員への周知を図ることであると述べられていた。

終わりに：各提言の後で行ったグループ討議では、テーマに関わることは勿論のことであるが、テーマ以外のことについても、全国の様々な学校の特徴的な取組や学校を取り巻く状況について情報交換(例えば、校区内に株式会社立の小学校がある、とか…)ができた。閉会のまとめとしては、若年教員には自らを「振り返る力」をつけさせたいということと、私たちに続く「次の教頭の育成」という視点を持っていきたい、と締めくくられた。

第5B分科会

「教職員の専門性に関する課題」に参加して

伊賀市立島ヶ原中学校 山口好文

私の勤務する中学校は、小学校と同じ校舎(施設一体型)で、小中連携を柱に取り組みを進めている。教頭としてどんな役割をしていけば良いかこの分科会を通して学ぶことがあればと思い参加しました。

5 B分科会の課題は、「教職員の専門性に関する課題」でした。

午前の提案は、「教職員の指導力向上を目指

す教頭の関わり—小中一貫教育の取組を通して—」高島市立朽木中学校 今井俊彦先生でした。高島市では、平成26年度から市全体で本格実施され、取組内容は、「共同授業研究システム、一部教科担任制、学習環境づくりを行った。中学校生活への不安を緩和するため合同学習会、小中合同体育祭、部活動体験など交流活動を行った。教頭は、小中一貫教育コーディネー

ターと連携して、今後の取組のアドバイスをを行う。教職員の意識向上・授業改善の取組として、個の成長の姿を通しての授業研究、市の教育研究所と連携し、授業力を高めるため示範授業や研修会の取組、ICT機器活用による授業づくり、ICT活用技術向上のための研修会が行われていた。地域とともにある学校づくりを推進するために地域学校協働活動推進員と連携している。」とのことでした。

様々な取組の中で、教頭は、より良い取組ができるように協力したり、アドバイスや担当者へのサポートをしたりする必要性を感じ取ることができました。

午後の提案は、義務教育9年間で育む地域とともに生きる子どもの育成—小・中一貫教育の推進と教頭の役割—豊後大野市立朝地小学校佐々木直子先生でした。内容は、「朝地小学校は、平成26年度に連携型小中一貫校となった。研究の概要として、小・中9年間でどのような子どもに育てたいか。子どもの姿から、学校教育目



標を共有すること。会議を目的別に実施すること。9年間を見通し3期〔Ⅰ期（小1～小4）Ⅱ期（小5～中1）Ⅲ期（中2～中3）〕に分けて教育課程の編成を行うこと。『乗り入れ授業』を実施すること。小・中連携行事の改善のための教職員の意識改革をすること。地域・保護者が協力し教育振興を図っている『絆の会』と連携すること。などの取組みを進めていた。」とのことでした。

教頭の役割として、小・中一貫教育の意識の継続・小中の指導法や体制の違いなどを把握し教職員をつなぐマネジメントが重要であることを学びました。

第6分科会

「副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題」に参加して

菰野町立鶴川原小学校 小林 朗

（1）平成30年度全国公立学校教頭会の調査の結果及び分析の報告

全国公立学校教頭会総務調査部から昨年度自分たちが回答した結果を分析して、日本の教員の勤務時間縮減に向けて効果的な取組のヒントとなるものです。文部科学省の緊急対策5つの内容が紹介され、緊急対策として具体的見直しとして、どの学校でも行っている業務のうち、基本的には学校が担うべき業務、教師が担う必

要がない業務、負担軽減が可能な業務に分けていくことが必要と報告がありました。また、主に時間と労力を費やしている職務、負担（疲労やストレス）に感じる職務についての調査結果についても報告がありました。次に、副校長・教頭の勤務状況についての報告がありました。昨年度の調査結果からも学級担任との兼務をしている割合が20パーセントを越えている都道府県（高知県・小学校）は、1つにとどまるもの



の、ほかにも兼務している都道府県もあり、自分の置かれている環境が恵まれていることを再確認しました。またこの後、主幹教諭等の配置が副校長・教頭の負担軽減になるかという報告がありました。

（２）講演

テーマ「続・学校における働き方改革

～副校長・教頭としての役割～」

講師 青木 栄一氏 東北大学大学院准教授

講師先生は昨年度の全国大会に引き続き、ご指導をいただいたそうです。昨年度の参加者が、全国の副校長・教頭の１パーセント、更に今回をあわせて２パーセントとなり、今年度を働き方改革２年次と位置づけているとお話がありました。先ほどの報告の内容にも関連し、本講演の目的は、「副校長・教頭が生き生きと働いた

めに、副校長・教頭の超・長時間労働の実態とその改善方法や取り組むべき業務と求められる資質能力」と確認があり、海外での調査結果との比較等、興味深い内容でした。

（３）グループ討議 テーマ「学校における働き方改革～副校長・教頭としての役割～」

各学校や地域の取組の現状及び課題について、事前アンケートをもとに参加者同士（自分の第２グループは９人）の情報交換を行い、学校における働き方改革に向けた教員の意識改革や業務改善についての効果的な方策（一押しプラン）を作成し提言を出し合いました。参加者は、北海道、奈良、和歌山、埼玉、大阪、神奈川、京都と広範囲で、地域性も異なりますが、情報交換する中で、校務支援システムの導入、留守番電話の設置、通信の精選等のキーワードが出てきました。また、そういった方策には、学校だけでなく、行政や保護者・地域等を巻き込むことの必要性を共通理解しました。このような討議をもとに、学校における働き方改革推進に当たっての課題等を明確にし、解決の方向性を探りました。講演の内容も踏まえながら、学校における働き方改革を推進するための副校長・教頭としての役割について認識を深めました。私の第２グループは提言する代表として選出されました。

特Ⅰ分科会

「時宜に応じた課題」に参加して

名張市立北中学校 山 本 芳 広

今年は梅雨が明けるのが遅れていましたが、７月後半から猛暑が続いています。その中、７月３１日～８月２日の３日間、滋賀県大津市で第

61回全国公立学校教頭会研究大会が開催されました。

２日目、特Ⅰ分科会「時宜に応じた課題」に

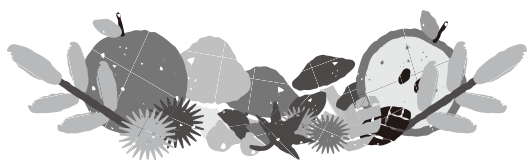
参加しました。分科会では、信濃教育会会長の後藤正幸先生と前麴町中学校副校長の宮森巖先生から提言されました。後藤先生からは、「カリキュラムマネジメントを通しての学校教育の改善について」とのテーマで、信濃教育会の実践例を挙げて提言されました。

児童・生徒中心の教育課程を編成する上で、子どもの人としての成長を期して「何を教えるか?」「なぜこの方法で教えるか?」「今日的教育課題を踏まえて編制されたものを構築」を軸足に置き、「子どもに立ちかえり、子どもの内から構成されるもの」という前提に立って編制される必要があります。それを実践している伊那小学校の取組を紹介頂きました。そして、伊那小学校の卒業生が「小学校時代に自己肯定感や達成感を得られた」、「今、生きている基盤が小学校にある」と話していたことに感銘を受けました。グループ討議では、学びの主体者は子どもであるという原点に立ち戻り、子ども中心の教育課程の編成および授業改善についてそれを支える教師の自主性や熱意を育むための副校長や教頭の関与やあり方を話し合い、教師の気持ちに火をともし、持続させることが大切だと



考えました。

宮森先生からは、「校長の推進する学校経営及び学校改善のための副校長・教頭の役割」とのテーマで提言され、麴町中学校のチームで子ども・保護者に対応していく全員担任制、生徒の学びへの自主性を育む定期テスト・宿題の廃止、部活動をPTA組織に任せたり、外部人材を積極的に活用したりするなど働き方改革についても提起頂きました。大きな学校改革・改善を行う教頭は、常に教育目標を意識し、取組の目的に立ち戻りながら教師の意識改革に繋がるこまめなミーティングや個別の対話を行い、職員に責任を持たせることの大切さを学びました。目的や目標を明確にすること、学校の当たり前をもう一度見直す事、子どもはもちろん教師や地域、PTAの主体性を育むための教頭のあり方について研究を深めることができました。



特Ⅱ分科会

「環境教育・環境問題への取組」に参加して

鈴鹿市立白子中学校 須藤 雅哉

私が参加した特別分科会Ⅱは、開催地の創意を生かした課題「環境教育・環境問題への取組」

を取り上げ、2名の方の講演の後、5、6人のグループで協議を行うという形で進められまし

た。

2名の方の講演の内、最初にお話をされた滋賀県立びわ湖フローティングスクール所長の小野寺稔香氏の内容が印象に残っているので紹介します。

びわ湖フローティングスクールとは、

- ・ 滋賀県が所有する学習船「うみのこ」
- ・ 琵琶湖場で1泊2日の体験学習
- ・ 県内のすべての小学5年生が対象
- ・ 必ず複数の学校が一緒に乗船
- ・ 船内や寄港地で、琵琶湖の環境やふるさとについて学ぶ

という乗船学習です。

昭和58年から始まり、今まで県民の約40%が共有体験しているそうです。

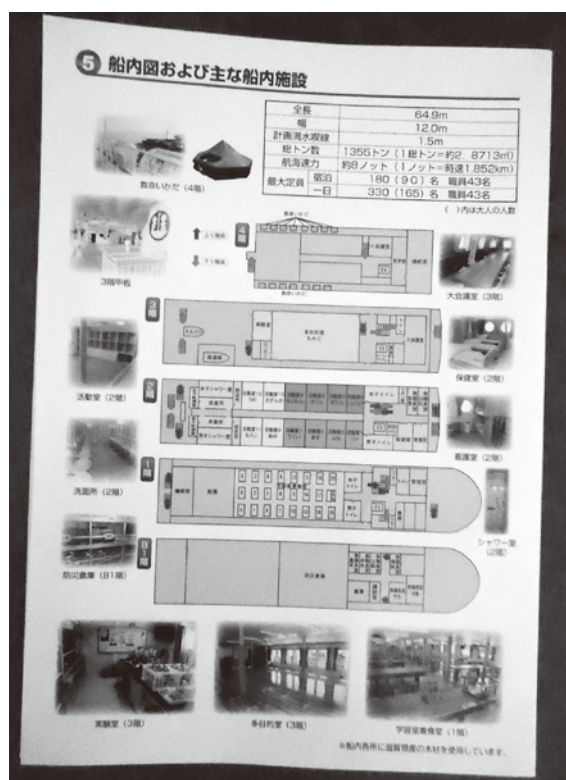
最初から「環境教育」が目的の取組かと思いきや、その経緯は、当時青少年の非行の増加・低年齢化への対処ということでした。船の持つ教育的機能（船は人を鍛える。船は規律を教える。船は心と心を通わせる。船は人の視野をひろげる。船は「夢とロマンを」あたえる。）に

期待した乗船学習は、社会が抱える課題や教育施策の推移に対応しながら、今の形になったそうです。

昭和、平成、そして令和と30数年間この事業が継続してきたことは、滋賀県民共通の財産である琵琶湖の存在が大きく、この財産を子どもたちの教育資源として活用するに当たって、滋賀県の全面的なバックアップ（建造費30億円、維持管理・人件費、年間2億円）があり、子どもたちの可能性にかける姿勢を強く感じ取ることができました。

この取組は、子どもたちが環境に主体的に関わろうとする力を育むに止まりません。出身小学校や年齢が違っても「うみのこで食べたカレー美味しかったよね～」などと、共通の体験を通して、世代を越え、場所を変え滋賀県民をつなぐ役割も担っているそうです。

「びわ湖フローティングスクール」が、共同性、道徳性、社会性など多様な学びにつながっていることを知ると同時に、県民の拠り所である「琵琶湖」の存在を羨ましく感じました。



「幸せの魚釣り」

津市立倭小学校 岸 田 謙 介

この原稿の依頼を受けるにあたり、少し困りました。というのも、前135号に本格的に釣りをされている成徳中学校の藪中先生の記事が掲載されていたからです。私の場合は下手の横好きですが、さりとて他に紹介できるほどの趣味ありません。

ということで、2号続きで釣りのお話、どうぞご容赦くださいませ。

私は生まれも育ちも北九州で、小さい頃は、近所の小さな港の船溜まりで、家族総出で糸を垂れておりました。「家族の夕飯分釣るまでは帰れんけんね！」との父の号令の下、当時の相手は子どもの手の平サイズの小魚でしたが、1匹釣ると「尾頭付きが釣れたね」と母が喜ぶものですから、夢中になって釣ったことを覚えています。

三重の地へは、大学を機にやってまいりました。そして三重の釣り場を少しずつ開拓してきました。

ですが子どもの頃に叩き込まれた「晩のおかずを釣って帰る」ことは今も染みついており、釣りに行きボーズ（何にも釣れないこと）だと、「サザエさん」の波平さんのように「魚屋に寄って帰る

うかしらん」という考えが頭をよぎります。

このような私の釣りですが、いざ竿を出すと、毎回ああでもないこうでもないと下手な考えを色々と巡らせます。これがとても楽しい。没入感といいますか、この時ばかりは他のことを一切忘れることができます。

そしてもう一つの楽しみ。それはやはり、釣ってきた魚を自分でさばいていただく、夕飯と晩酌です。（時々カレーになることがあります…（涙））

「一時間幸せになりたいなら、お酒を飲みなさい。」

「一月幸せになりたいなら、良い馬を買いなさい。」

「一生幸せになりたいなら、釣りを覚えなさい。」

中国の故事にもある通り、私はこれからも幸せを求めて、夏も冬も海に通い続けることでしょう。

「好きだねえ」と言われつつ。

藪中先生、今度ぜひご一緒させてください。また、釣りがお好きな方、やってみたい方はぜひ岸田までお声をおかけくださいませ。



郡市だより

『宝物』～校長先生ありがとう～

鳥羽市立鏡浦小学校 奥村陽子

鳥羽市から志摩市へ続くパールロードの中間地点、かき養殖で有名な浦村町に鏡浦小学校はある。複式学級2、欠学年1、全校児童21名の小規模校である。

「今日の業間遊びは運動場でドッジボールをします。早く集まって下さい。」「昼の全校遊びはこおり鬼をします。鬼は○年生です。」毎日、児童会の呼びかけで子どもたちは運動場へ飛び出して行く。どこの学校にもある子どもたちの光景。

もう一枚、これもまたどこの学校にもある運動場の写真。しかし本校の運動場は、今年3月に定年退職された前校長の手作りだ。まるで、明日は陸上記録会かと思うほど美しく整地というか、整備されているのが分かって頂けるだろうか。

2年前、校長はかつて勤めた頃の運動場の変わり果てた状態にショックを受けられたのだらうと思われる。向かいの中学校が閉校となり児童数が激減し、草は生え放題、岩盤が剥き出しのグラウンド。校長は早速改修工事に取りかかった。重機が入り、荒れた表面全体を数cmも削り取ったという。地盤の良好な場所を選び、向きも変え、新たに生まれ変わったグラウンドは、なんと、5月の運動会に間に合ったそうだ。当時の様子を知る職員は、「とにかく速かったよ。」と驚く。

この日からグラウンド整備が始まった。子ども



たちが気持ちよく使えるように、外遊びが好きになるように、運動が大好きになるように。周囲を山に囲まれた本校は、イノシシ、シカ、ウサギ、サル、タヌキ、キツネなど野生動物の宝庫。運動場の整備は毎朝の糞拾いから始まる。日に数十個～数百個、千個を越える日もある。登校してきた子どもたちに、「おはようございまーす。」手にしたほうきを大きく振って、校長の声が響きわたる。「おはようございまーす。」子どもたちも満面の笑みで声を張り上げる。いつもの朝の風景。重いローラーを押し、トンボをかけ、白線を引いた。休日には、車で何十周、何百周と走って土を踏み固め、炎天下も構わず雑草をやっつけた。2年間、雨降りと出張以外はほぼ毎日、運動場に出て運動場を守り抜いてくださった。3月31日、退職その日まで。子どもたちは知っている。みんなが知っている。運動場は校長先生がくれた、ステキなステキな「宝物」。

